伊香保志

巻二

伊香保志中巻目録

○名跡

伊香保神社
醫王寺
上の山
關所跡
向山
湯元
物聞山
御よみの松
温泉神社
天宗寺
伊香保八景
易の澤
こゝ澤
金毘羅山
丸山
水澤山

文曜文庫
井上氏藏書

水沢觀音
船尾の瀧
森田堰
有馬の郷
桃井の郷
箕輪城趾
からめきの温泉
車川
群馬の松
高根
船尾山
八坂の井手
湯上村鑛泉
伊賀保神社
手出の郷
椿名神社
白川
群馬の郷
榛原

二ツ嶽
八ツ塚
阿蘇山
摺碓岩
伊香保富士
石垣沼
烏帽子ヶ嶽
硯ヶ嶽
冰室ヶ嶽
天十峠
蒸湯
相馬ヶ嶽
黒髪山
座主ヶ池
伊香保沼
名尾川
[illegible]ヶ嶽
掃部ヶ嶽
木部の墓
榛名山

○ 神社
○ 近傍各地高低實測表
○ 産物
○ 伊加保、椿名、榛名三神の辨

伊香保志中巻

東都　秋萍居士　輯

名跡

伊香保神社　伊香保の市街の南の上石段の第一高き處に鎮座せ群馬縣社とせ古より國幣社なり郡中廿九ヶ村の鄉社なり近傍九ヶ村氏子たり祭る所乃神せ大己貴命はして毎年九月十九日せ大祭とし維新の前せ湯前大明神と称せり湯前神ちの東ハ赤の三神の辨并せ明治十一年春燒失の後今尚假殿なり（下巻の赤城山の変を見るべし）座せり社地海面より高きこと二千六尺南ヶ山を負ひ東北せ打開き遠くせ越後境

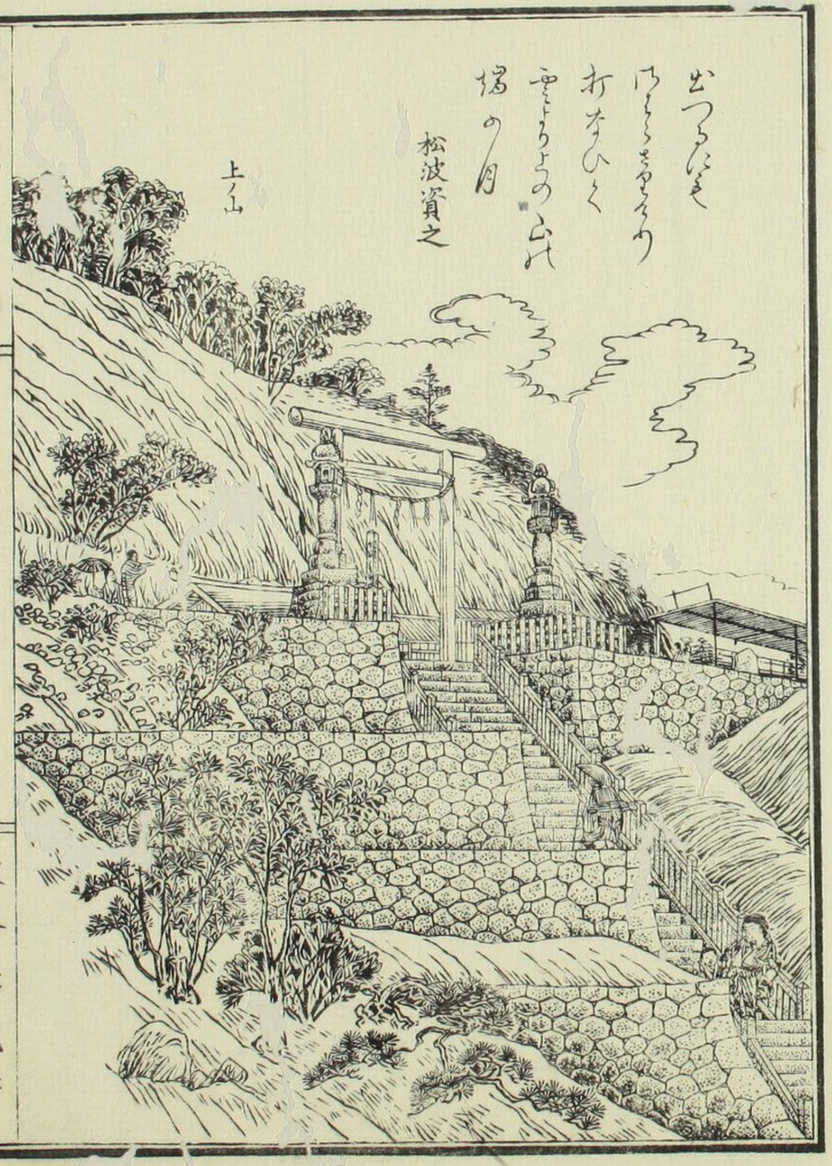
伊香保沖社

そらのいろもあかの
ほのぼのとあけゆくに
まつのこえのみする
はるをしられぬ夢

博房卿

出つるかと
ひとりぞながめ
あけぬれば
雲ぬけ出る
月の月

松波資之



ひる三國峠を望み右は續きて會津日光の山々連なり近く
吾妻川を隔てゝ正面に小野子山 小野子村よりみる又男子山とも
書たり名抄郷名小野の地あり
さいかの頂三尖を落て掃きたる如く持山見申 上卷にあり
萬葉集に詠ずる所あり 卷萬葉歌の中に注も更に右に向ひ東
に近く赤城山見え又眼下に市街に臨み絶景の地なり
市中諸樓より北の方の
眺望も皆此の如し
當社は延喜式神名帳に上野國群馬郡伊加保神社 名神と大
なる是なり 未の三神の名神大座とするは神祇名
官合せ考へべし
神祭二百八十五座の内に祈年月次新嘗等の即祭に案
上官幣に奉幣なる神は重き神なり 國司の幣を國幣という

名神とも名ぐはしき神なりと云ふ大座小座を祭る座の
多ぐはしなり又當社位階の事は 乃後記に承和二年九
月辛未に上野國群馬郡正賀保社に名神同六年六月甲
申奉授上野國無位伊賀保神に從五位下又三代實錄に貞
觀九年六月廿日授上野國從五位上伊賀保神に正五位下と
なりその後同十一年十二月廿五日に正五位上同十八年四月十
日に從四位下元慶四年五月廿五日に從四位上と次第に授
あらる 以上三代實錄 その後代々の朝より天下の諸神に位一級を
增せの文の諸書に見えたるを朱雀帝の天慶三年庚
子正月、白河帝の永保元年辛酉二月、崇德帝の永治元年辛

兩八月、高倉帝の治承四年庚子十二月、後鳥羽帝の元暦二年乙巳三月、土御門帝の建仁元年辛酉二月、龜山帝の弘長元年辛酉二月、後宇多帝の建治元年乙亥七月、後圓融帝の永徳元年辛酉二月等あり（其の後も尚ほ欽且以上の中辛酉あるは革命の御祈のためなり）

其の年こゝに推せば伊賀保の神を建治元年子正一位子ありたまへりしを神の位階を授あらるゝを人の位とは異なれ位田とは位の高下につきて田を給はることなれば神田としては寄附せらるゝ目あり大臣小座官幣國幣あるべきを又上野國神名帳の素めの末めの雜の下に注せるは正一位伊賀保大明神と祀せり又倭論語卷一神部ゑ

伊加保大明神と記上野國ゆゑ

わが國の直き心せ人の國はたゝのきらゝあら德とあれかをゆゑ

以へり益人よ正しく直き心せ人をほめ、まあびあるゝを法し

と載せたり　倭論語に傳書あれど必ずしも引けるゆゑ

温泉神社　伊香保神社の攝社あり當村に社はして少彦名の神を祀る往時は藥師佛と配せ祭りしを藥佛と称せり

吐事末の三神の堂を伊香保神社の西に并びたゝしが炎上の雜の変あり

後未再建あくしを因神社の中に合せ祭る四月八日を例祭なれ上野國神名帳に群馬郡正三位温泉明神をつる

かれあると以へり

湯泉山醫王寺　伊香保神社の石垣のかたわら天正二年甲戌八月岸筑前介安兼が草創あり天台宗にして法川駅の真光寺末にて今回寺と号す兼ぬ　元を温泉神社の別當なりしを今別当にて温泉水薬師を本尊とせし災後假堂なり湯前明神の別當湯泉寺に寛永中創立して山の上伊加保神社の傍なりしが今廢せり當寺に併せ

香雲山天宗寺　市街の東北の入口なり曹洞宗なり武州郡骨波田村長泉寺末にして入間今の渋川の良珊寺より兼ぬ　天正中木暮下総守祐利の開基なり村誌より元和元年所ラとなり存心叉年と組諸を以て或を殺後子孫の建てしなり天宗の中を考ふべし開山を中山良信和尚なり祐利の法号を興雲院天宗存心庵主と号ふ依て寺号とせし火災の後未建立ず　當寺の門前に天満宮あり當村木暮氏一族の鬼門除なりしを祭る所あるしが焼けて再建ふし又是より東今寺西に公立の小学校の山に八幡宮あり木暮八郎が氏神なり焼け十二年を建つ　明治六年建つ十一年焼け十二年新築成る生徒男女八十餘人

上の山　町の南乃上なる山の名なり伊香保の町を即此山の中腹に家居せるあり　雑木生茂り峻しく登り難し八景の一なり月に名あり

伊香保八景　八景なる上の山乃月、開屋の雲、猿澤の猿、物開山の時鳥、丸山の つゝじ、高根の鹿、二ツ岳の雪、沼の杜若を以て皆地名なり次に此八景の事何人の何時頃に定めたり知らず詩歌に多く侍りし物開山の時分と伊香保の沼のかやめ草との歌か巻に の外を皆いと近き世の

詠あれぞ別て掲げぞ

關所跡　町の坂を下る處より今廢せられて只門の址のみ存ず　関屋と称する酒肆あり　関屋の雪を八景の一とす　雖然乃前は三國街道なる金井駅関所なり　今小牧村なる間なる吾妻川水増しを通行止まる時は高崎より當村を過ぎて西北なる五町田駅に出で又西北に抜き吾妻川の上流橋なる洪水なる落ちぬ　渡を原町駅に出で支よりの東方なる中野條駅尻高村を経て三國道の中山驛に出づるなり　三國裏街道なり因て當地に番所を設けられ村民なれを守る

巻村民八氏

湯の澤　町の西なる深き谷なり西南なる二つの岳なるの谷なる水を温泉の殘流なり此を落ち北に流れを湯中子村の下にて沿尾川に入る

向山　湯乃澤を隔て西なる山なり山の本名を一文字といふ伊香保の町と相向へぞ向山の名あり天保三年村民福田某の開く所にして土地幽邃風色好く玉兎菴を以て酒肆あり　福田氏　鯉鮒鰻を池に畜ひて客に供す傍に辯財天の祠あり此の谷を鬼谷といひ西の山を袋山といふ此邊の山楓樹多く紅葉の名所とす伊香保より榛名へ趣くそは向山を過ぎ此より南小石の坂路なる石坂と切通しいふ甚険し

十二三町登りて榛原後手なる出づ

猿澤　湯元路の中程なる左の山より右なる湯の涯の谷へ水の流れ落つる處なり往年は此邊猴甚多かりしなり

猿涯の猿八景の一なり

湯元　湯元路を町の上なる藥師堂の境内を過ぎ山の崖を湯涯なる沿ひて南へ行き前の猿涯をも過ぎ尚南へ行くあり凡八町許はして小沢東南なる斜なる来りて湯涯なる落つる所の地なる湯本神社藥師といふ　なる社の逐今開きて遊園なりたる の小渓即温泉の流れなる沿ひ登りて二三町樹木生ひ茂り両崖のかりたるなる温泉涌けり　涌口の事は上卷の温泉の條

なる六の谷頭の地より近く二ツ岳なる新道開けたり

十三四町にして至るべし

金毘羅山　頂なる石の小祠なり琴平秋葉の神を祀る故なる名なりし町の東なる聳ゆる頂まで嶮しき坂を回り登る十町許頂なる樹木数株ありて眺望奇絶なり北を越後會津日光の山と連なる東を赤城山の全形を見裾野遠く蟠る延びて頂常なる白雲を吐く南を當國の平野を望み利根川烏川を白帯と引くがごとく前橋高崎の市街其間なる隠現し て其外の先を武蔵なる連なる極目際なし又頃まぞ伊香保の市街を踵のひを見るべし

物聞山　藻塩草、秋寐覚写す物聞山を上野とかり和漢三才図會ニ物聞山を伊香保ちかき上野志名跡考写す伊香保温泉の東南松茂生し山ありとかめ依て前のかんぷら山の本名あり或を云水沒山ニ夫木集の伊勢の詠ニ写て名言く今物聞山の時鳥を八景の一写る出齋家乃集にも物聞山の歌かり

夫木集　いつのまにかるる物聞山の呼子鳥ゆふ月夜の郭公　伊勢

丸山　伊香保の町より小十町許の麓の小高き岡あり樹木欝蒼として中ニ丸山稲荷の小祠かり数年前を参詣する人いと地も荒ちたり此山の躑躅を八景の一写る今を失せり

御蔭松　伊香保より澁川路をかること一里許なる路の右の岡ニかり喬松一樹空ニ凌ぐり明治十二年　皇太后宮温泉行啓の時この松の下ニ御野立かり村民後ニ御蔭松と稱し萬里小路博房卿の詠を揖取素彦君の文と銘碑を建つ

芝中の松のやとりにあ世ぬ千ちとせの千ちとを経

是歳己卯。皇太后宮。行啓伊香保温泉。七月十七日。車駕發京。往返由此道。時屬盛夏。掃松下以休車駕焉。既而。土人建石命松曰御蔭松。請博房卿之詠。屬余書題額。博房卿以本官從駕。余則管地方。卿之詠。

芝中
御蔭の松
吉野立の松と云

水澤山
相馬方面
二ツ岳

芝中の
松のやうに
ものをうけて
ゆるさぬ
君の
寿をも
ながらへ
博房卿

余之題。皆不可辭者。碑成矣。併記其事於碑陰。亦出土人之意云。明治十二年。己卯秋九月。群馬縣令楫取素彦撰并書。

水澤山　又淺間山ともいふ伊香保より東南一里水沒村の上なり此の山の東北の端なりて殊に尖りて聳えたるを遠くより望む（坂又墨田川堤より見る）この山二つ岳と共に東京九段頂まで三十町甚嶮し頂に淺間の社あり陰暦七月十三日近村の人登り詣づること夥し

水澤觀音　水沒山の東乃麓水沒村の上なる寺を五德山水澤寺といふ天台宗にて僧房を坂のぼりなる山門本堂僻地にありて荘厳宝暦の頃の再建といふ本尊千手觀世音を坂東三

十三番札所の第十六番なり向ひの堂の左なる坂佛にありて元亨四年三月廿日と記し左右に梵字を刻つけたりとも傍に六角堂にあり立像の鉋地藏佛（長六尺六體を六面に安しなせり輪轉せしむ今盗を恐れて本堂に納む又寺の縁起に伊香保姫と以ふものを載せたり）

舟尾山　又不入とも書き水澤山の南谷を隔てたり低し昔此山に巨刹ありて傳教大師の開基せしかいふ今堂の入口の山の南の中腹に遺跡ありて又その頃を山中九十九谷と唱へて谷ごとに僧房數百ありて今その跡なりとして某こゝの地名殘れり文德実録に嘉祥三年夏四月丙子詔して上野國聖隆寺を延暦寺の別院とせりと今何地なるを

知らまゝば或を此寺あるべしといふ土人伝へ云千葉介胤正千葉
常胤の長男あり建仁二年六十一歳す　此の山の観世音を祈誓し
當郡惣社を常胤の城址なりといふ
て一子を得たるを佛託あれぞ短命なるべしとて寺僧を属
して山を置あり後胤正その子曾そんとて山を入る僧
徒匿して出さば胤正怒りて山を攻めしを却て僧徒の為
に敗らる後胤正再挙して遂に一山の堂坊を焼き亡ぼし
たりといふ　船尾祀といふる宮本一巻ありてこの事を祀を安談のみ多
し又山下の山子田村を今天名宗柳澤寺といふるなり山号
を船尾山といふ即此寺を称しといふめなりと
いふ且寺に宝亀二年の古鐘ありとぞいふ

船尾の瀧　船尾山の東北なる崖の絶壁より落つ高さ二十
丈幅二間水烟四散して近づくべからず壮観なり是より東

北なる滝川の逆より流れ遥に見えて白布を懸けたる如
しといふ下流を瀧の浮を いひて東に流れて利根川に入る
柏木より伊香保路を此滝の浮を渡るなりその
路なりの東より滝までを浮の奥二十町ばかり
八坂の井手　萬葉集に八坂の井堰を詠める地を水澤村
より南の方八九町なる八坂といふる小坂の上なり船尾の瀧
の逆を分けて今井出野、井出野入或を井出平などいふる字
なるなりその舊跡にて堰の跡なりあるなりいふ井出野の名は
下巻の萬葉歌
の部に見るべし
森田堰　又新堰といふ即船尾の滝の流を分ち引きて此より
あるある上野田村へ導ある水道あり天保年中上野田村乃

森田重信なる人官に請ひて開く長さ千七百間ばかり村人永く旱損の患を免れたり（滝の源の北の上なる人家棄る流きあり）古の八坂の井戸の跡とも云へべし

湯上の鑛泉　澁川驛の南三國街道湯上村路より東の平地に涌く冷泉にて鑛氣ありて古老傳へ云往古此の地に温泉ありて坂の村の名とせし後伊香保の温泉涌き出でしより此の泉脈止まりぬ此の冷泉をその名殘あるか

有馬の郷　これも三國街道にある有馬村その地なり和名抄國郡部の郷名に群馬郡有馬（安利萬）とあり延喜式左右馬寮上野九牧の中に有馬島の牧とあり拾芥抄牧名

にも有馬の名あり

若伊賀保神社　有馬村にあり村内泰叟寺の境内の山に鎮座す三代実録に貞観五年十月七日授上野國正六位上若伊賀保神従五位下元慶三年閏十月四日授従五位下若伊賀保神従五位上同四年十月十四日授正五位下伊賀保神正五位上等見えたり（此の末の伊賀保の上に若の字を脱せるか）上野國神名帳に総社相殿十社の内に正一位若伊賀保大明神とあり又回書に従四位下伊賀保木戸明神、正五位下小伊賀保木戸明神（共に有馬村の字神戸その舊地なりと云ふ）正五位下小伊賀保明神（水沒の観音堂その旧地なりと云ふ）従五位上伊賀保若御子明神等と載せたるもの

社とも伊香保の号ありるを見るべきぞあれらの地古を皆伊香保の分内なりしあるべし

桃井の郷　和名抄郷名に桃井毛々と、けり今の船尾山の麓

山子田村の遠その舊地なり足利氏の頃桃井氏の一族此に起る城址とけり今桃井といへる郷名の區域此も甚廣し

井出の郷　亦和名抄郷名に見る今高崎と柏木村との間なる

井出村なる萬巣の八坂の井にを此地欲ともりへ（巻萬葉歌の部に）

し今村内に八坂稲荷井堤明神とけりふるりふ夫木集に

井出の社とよあるも此なるとも此ならへめ

箕輪の城跡　船尾山の南、東明屋村にけり又箕輪とも書

あり　箕輪軍記に抑此城を箕輪と申を幸に榛名山乃

尾嵩堀切築き左る城の南表を箕に似たりとて名づけ

たり云こなけり當城を大永年中長野伊豫守在原信業

長野を和名抄郷名にも出づ此地より南、本郷白川、が築き所所を

郷名にも長野氏とせしを長野氏を鎌倉の管領山内上杉氏の長臣にして當國の豪

族なり信業の子信濃守業政忠勇衆に超ゆ天文二十

年上杉憲政當國平井の居城を北條氏康の攻め落され

越後に奔る業政その後上杉謙信に屈して北條と戦ひ

弘治永禄の間武田信玄此城を攻むること五年を歴まで

も業政常に防ぎて却く、永禄四年業政歿し子右京大夫

業盛継ぐ同六年武田氏大舉して攻む業盛能く防ぎ

遂に陥る後武田氏に属し瀧川氏北條氏に屬し天正十八年に至り徳川氏井伊直政をこの城主と為し十二万石後直政高崎に移りて此城を毀てり郭、堀、門樓等の跡あり

椿名神社　箕輪の城址の東南八町許椿山といふるあり鎌倉九代記に箕輪城を椿名明神山の尾崎に移り云々とあり延喜式神名帳に載る椿名神社是なり椿名大神宮といひ祭神を天照太神三輪大神西宮大神三社相殿なりと額に三輪大明神とあり箕輪と地名も上野國神名帳に従一位椿名大明神とあり此神に起るの故

がらめき温泉　相馬が岳の東南の麓西明屋村の山間にあり土人をガラとのゝしり泉質詳ならざれども諸瘡火傷に効あり温氣甚薄きが故に火に涌くして用ゐる

白川　又相馬川ともいふ相馬が岳掬雄峠等の谷々の水落ち合ひて東南に流れ車川に落ち合ひ南に流れ白川村木郷村を過ぎて烏川に入る

車川　榛名山の冰室谷より出て南に流れ敷村を歴て金敷平村の南に至りて白川に入る

群馬郷　善地村車川の宮即その舊地なりといふ和名抄國郡部に郡名郷名共に群馬久留末とあり榛名山元亨三年の鐵燈籠に車馬郡とあり又この頃までも尚ぐるまといひしを今は字音にぐんばといふ或云久留末とも黒馬乃

義あらべし延喜式左右馬寮は上野國九牧とゝけりて此國を牧馬ゝ因ける地名多しとゝ前の有馬村あとゝ紙なり

大木　都より全唱ゝ多くの里人を引ねれば波らきん　人

此刈根川は今の前橋なる刈根川水廣敷川せりゝとゝぞ此を人と寐まかけたゝ

群馬の松　善地村の南十文字村今を長野郷字長坂平とゝ入るとゝ

変よりけり元禄三年舊の樹を枯せしは今の松も大木なり

本多は高さ二丈餘東西十二間ゝ亙る　此より南白岩村ゝ坂東十五番白岩觀音ゝ彩長谷寺といふ

○以下伊香保の西南ゝ戻り記す

高根　伊香保町の西南湯の泉は陽ゝ高く見ゆる山なり

樹木は二三十年前をこの山ゝ鹿多く住みしなり

高根の鹿は八景の一とし

榛原　伊香保より西南榛名山ゝ至る路を廣き高原はしを

うれは伊香保平とゝ東南を二の岳、相馬ゝ岳、西北を高

根、西澤ゝ限り西南伊香保の沼ゝ至るまで凡二里許一

面の茅原なり萬葉集ゝ岨の榛原と詠めるは此地を

指せるなるべし古は榛ゝしの欲　榛原を榛ゝ原とゝ

或云水海柏木里の裾　夏秋の間草花多し　野せりゝん

二ツ嶽　伊香保の南稍西即榛原の南ゝ

峯駱駝の背の如く西北なるは男岳とゝ　水海山、船尾山の西雙

女岳とゝ西南の陰ゝ孫岳と　稍る東南なるは

以ゝるゝ古低し伊香保より迂路して榛ゝ

至る三十町ばかり湯元より近路を行け山は樹木少く頗険し
女岳の頂に大なる孔ありの埋まを低き樹木生ひ霞後へり
即大古火を噴きし孔なり土人も此事を言傳へ全山花崗
石にて焼け割けるる跡處ここにありの火を東北へ噴きしと見え
山より東わ凡伊香保の迄一里四方の地浮石地層を成せり
此噴火山の火漿なりて知るべく榛の蒸湯も硫氣殊に
盛しし二の嶽の雪を八景の一なり殊に峯の間なる谷は夏
も常に冰ありの取まを市に出る

蒸湯　女岳の東の麓にありの砂地の間より蒸氣を噴く蓋し温
泉なれども分量乏しく　現に飲水を二十町南の榛の水沒の壺より取る　泉皆火脈の火氣

の為に蒸發せるなり騰ると見ゆ此湯古くよりこれありて
前は大なる木屋もありの浴者は常に数百人ありしに明
治維新の頃大に近傍の樹木を伐る又四二年の頃近き
山大に荒れしことありに夫より湯ぬるくなりの四六年に
至りて全く止まりの後樹木も再生長し水脈も復したる
るや四十一年三月に至りまた發せり地を掘りて土室
やし丈餘の材を杙に打込み多くの孔を穿ち　地底数丈皆砂土浮石なり
蒸氣を噴らしめ上に屋を覆ひ人その中に入りて密閉し
て體を蒸す密閉の熱度百十度より三十度に至る泉質
詳らかに硫黄の氣まして閉づること稍久しかれども動

二ツ嶽

伊香保より西南十町
ばかりにして
女岳の頂より往古噴火
の孔ありて
両岳の間より高く聳ゆ

雙峯積雪
積雪埋深谷
陰風吹不融
誰圖炎夏日
冷氣欲凌空

勾水

男岳

二ツ岳の雪

板屋にして雄の
ちらちんゐとして
ゆくうの花ちり乃
雪のこりなきの

資之

女岳

二ツ嶽の麓
蒸湯の景
朝討霊源出
客房雌雄嶽
下阪羊腸始
知硫火煮泉
處蒸氣浮浮
穿地鳴

依巖小屋似
危樓
誇說奇方引
客留
試入客中浴
蒸氣
淋漓熱汗滿
身流
中洲
名字賀屋
森田信四郎
山本松三郎

もそれぞ氣を息することこゝろ依て近辛を上る氣孔數處を穿ち百度位とある又別る屋を造る頭部を外る出體のこと蒸すのこゝろ伝るゴクモン　今傍て浴戸四軒こゝろ近村の者止宿して浴する多し寒湯治として冬来り治き疝痔、水腫て効こゝろを以へり伊香保の浴客一日の運動る来る者多し

八ツ塚　榛原の中程る南かへ並び八の土塚こゝろ寛文年中榛名との界標まとて築きしこゝろの此壁の字を見晴しをいふ小の岡の上て大岩こゝろの獅子岩といふ

相馬ヶ嶽　又相満或を聰馬と書を二ツ嶽の南る谷を隔てこゝろの連山の中て最こゝろ又最険し巖る鐵鎖を

或ハ總魔と也書す

互して攀ぢ登る小の方より登る稍易し　伊香保より西南四十餘町まて東る向ひ十町餘まして頂て至る峯頂を躑躅ヶ峯といひ平の将門の石像を置く相満明神といふ六尺許の立像を髪を被て剣を持ち官服着て恐しき相あり　山の名より近年附會して頂より四方数十里の山野を望むべし造り立てたるなり

傳へ云千葉介常胤の次子高井次郎師胤　相馬次郎師國の養子とある相馬小次郎師常と称す　嘗てこの山の頂て遠見番所を置きしゝ故て名とを

安蘓山　萬葉て詠める山なり裾野も廣く歌て由りて即相馬ヶ嶽の一名ありといふ又中古此麓の箕輪の麓か

あゝ安蘇の荘と呼びしといふ或云相馬が嶽を安蘇山が
岳といふと畧轉せしまゝ、けるぬ歟と
萬葉上野の安蘇山蕃歌を麦とゝ仮の孤々を麦 下巻に注す
夫木 あゝ恋を安蘇山とゝのまゝ蕃歌を麦みなまの 民部卿為家
同 吸あゝ恋安蘇山 と記ゝ麦を雪を後る 中務卿親王
同 安蘇山の中より出る白川の水の新毛の末にんを 同
或云安蘇山白川を肥後にありとまれど宗尊親王の歌も野を廣とゝの
萬葉の上野歌へかけられ集に引あゝつゝ白川云々此の
地に白川あり且親王を鎌倉に居たまひし
ゆれば關東の歌と云る方理に近ゝうん歟
然れども箕輪軍記に武田勢が城を圍める狀を說ゆるゝを
北を安曾山、相馬が麓、船方山、船尾の誤あらべし桃井が原、野尻が嶽

田舍ふて刈売を売るもく る碓をスルスとりゝ

山云ゝ、ければ相馬が嶽とゝ別ある歟 一說に船尾山あらべしと云
黑髮山 北國紀行に堯惠が長野 前の箕輪の乃陣所小野景
賴が陣にゝ黑髮山と詠みしを此ゝゝ眼の前に見
たる山の狀ふるに依ゝゝ相馬が嶽の別名あらべしゝ
然れども上野傳說雜記に伊香保の沼より西に硯嶽、北に
黑髮山、二つ岳、東に相馬が嶽とゝけれど是亦別の山ある歟と
堯惠を下野の黑髮山と詠をしゝ歟と然れど
今を土人に此の山の一名に呼ぶに至ゝ
以ゝ上毛志料より伊香保黑上山をみのわの北あるとゝけ 或云
摺碓岩 相馬ゝ嶽の西ゝゝ原の左の山乃上ある大巖をいふ
巖に洞門ゝゝ岩の形摺碓に似たるゝゝ名ゝゝ此変の山を

超えて東南箕輪の方へ下る路に搦碓峠といふ此山の南の麓より横に洞孔を穿ちたる跡あり往年高崎侯沼乃水を此より南へ導き箕輪室二三萬石の地を新開せんとせしに沼尾川の下流なる村と岡崎新田の者難議を申立てたりとて廢止せし跡なりと云 次のスリバチ池も此時掘せし跡なるべしなほ云

座主の池　原の中小富士の麓路の右へ沿ひて方三丈許の窪き池なり常に水涸れ頼印座主此の池の事頼印の事共へ巻山吹日記へあり

此山に住る者の住みし地なりと云 土人池をダスガ池と云 又スリバチ池なりと云

伊香保富士　小富士又沼端の富士なりと云 土人古言を存し沼を沼とのみ云 沼端沼の川口を沼の浮とも云 又沼尾川の土人を富士山とのみいふ路の右沼乃

東方の岸に沿ひて二つ形略駿河の富士に似たりなる麓にある沼の汀に一畚山といふる小山あり土人怪しき説を傳へて云往古恵神二つの一夜にして此の沼と富士とを作るの功一簣を虧きて夜明けたりその一簣の土を覆す即此の小山なりと

伊香保の沼　古伊香保村に屬し寛文年中より榛名に入る榛名の神の御手洗水と稱し東西十一町南北十七町周三十五町西北の岸を吾妻郡十二ケ村に屬せり古歌に多く伊香保の沼の此のほとり又いかの沼のいかめ草と詠るこれなり今沼の三方を皆山にして東岸のみ遠浅にて

伊香保沼

伊香保町より西南二里餘の山中にあり

今榛名山のみくまりと
りふ東西十一町南北十七
町周三十五町

伊香保沼

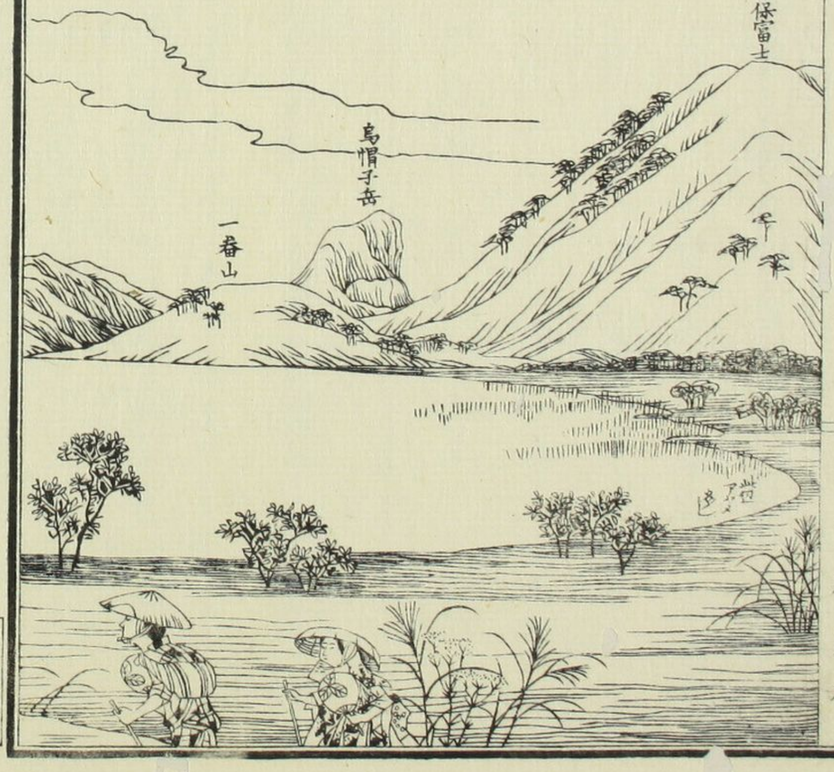
萬葉

ちはやぶる伊香保の
沼の浦に根をふる菅
吹く風ひんがや
絶えもせめけん

拾遺

伊香保の
沼の水の沼
いかりして
忘しもこと人を
吹きひとあ
まんと

讀人不知



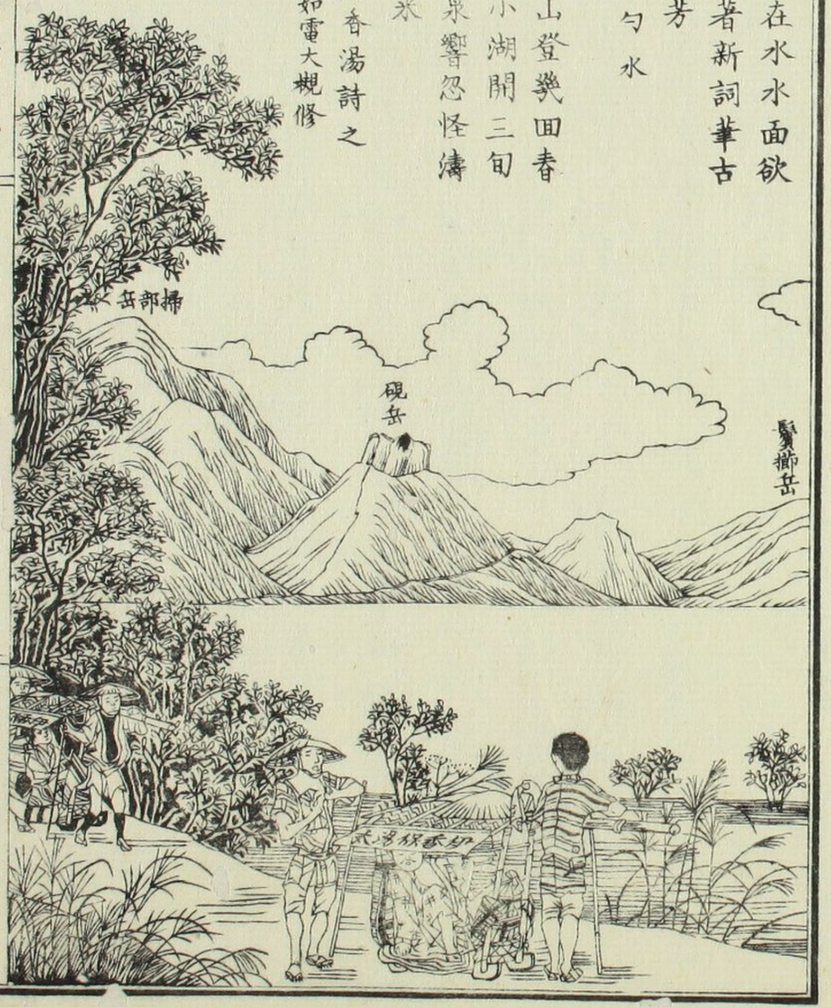
芙蓉低在水水面欲
生香敢著新詞華古
歌有古芳

勺水

路自香山登幾田春
名嶽畔小湖開三旬
慣聽溪泉響忽怪濤
轂岸下來

用先君香湯詩之韻

如雷大槻修



野につぐもめ此を鶏　その汀に漢蓀の一種菓細く長く
花の瓣狭きもの多くこの田中芳男君の説にを花戸ホ
いふカマヤマアヤメといふものあるといつも同種あるとりふ　下野のアカヌマアヤメ　又
岸田吟香君の説に云此の沼の雲にゐるを花叭つみあり
まべく深山の水邊に多くゐるものにて何時の頃より花戸
ゞ里に移し植多くて名を花菖蒲と付けたるをその菓乃
菖蒲に似たるゞ故なるべしとまた此の沼を四方の岸より
水涌きて常に烟波滔々たり流を小に流を沼尾川
とある此の沼夏の螢を殊に奇観とす　夫木集の歌に名を沼
水一面に冰とする鯉鮒殊に大くいとゝ、やまめ、ますなどゞ

魚多し往時を殺生を禁断す今は土人を憚りて多く漁
せゞ又沼の水を憚りて用ゆゞ唯旱魃の時に遠近の人
来りて雨乞を古史傳十八に曰く此御手洗の水を借りて此山
の神奴に神に奏し竹筒に入れて取らするを銭程
遠き處あるとも若途に滞る間を其霊に雨降りて
雨を乞ふ霊に験あり故に休らはず帰りて雨を祈しき
地の竹筒を持ちて本へ返を然すれゞ
決めて雨降らゞといふこと奏し云こ又岸田吟香君の
説に此沼往古は餘程大なる沼なりしなるべし今の二ツ
岳の麓より富士にかけての地形を見るに沼の方へ自然に

傾きて自沼の跡あり趣こゝろ座主が池あゞ其名残あるに然る大湖あるべ
きを都て聞え詞人の偽賞せる所ともあるべし
何時の頃よりか甚しき旱魃ありて此の沼を切落し沼尾
川の落口水を引き落せし事ありし由を二十年前萬延の頃より榛名
山の某院の僧より聞あり蓋古傳なるべし沼の狭くあるべ
き其頃よりの事なるべしといへり
石垣沼　古歌より多く石垣沼を詠み藻塩草等諸書に石垣
沼上野とこゝに依て伊香保の沼の異名あるべしと然れど
も或は赤城山の沼ともいひ或は石垣沼を地名なるべし
唯岩石の四方より垣のめぐ峙ちたるにいつまでも指

を所を知らず石垣沼石垣山の説下巻の山吹日記に見ゆ
沼尾川　沼の下流より小富士と烏帽子ゞ嶽の間を東へ
流る川筋より瀧となりて落つる處三ヶ處にあり其大なるを
辨天の瀧といふ頗奇観なりとぞ川下を湯の滝の水と合せ
て小岡寄新田の下にて吾妻川に入る川口を沼の川筋を群
馬吾妻の郡界とす
烏帽子ゞ嶽　沼尾川を隔てゝ沼の北岸にあり又冠山或
加々鞠山とも以て沼の南より望めば形風折烏帽子に似
たり
鬢櫛ゞ嶽　烏帽子ゞ嶽の西より並ぶ形の似たるを以て名とす

弦月を覆せるがめし以上二山を吾妻郡に屬せり

硯が嶽　鬢櫛の西南に連る山なり頂に大岩ありて

その面硯を立てるが如し

掃部が嶽　沼の西に聳えたる大山なり樹木鬱蒼す山の

西に南より少へ超ゆる路ありて藏峠といふ此の山も吾

妻郡に屬せり

冰室が嶽　沼の南天神峠の東なる山なりといふ或云此の山冰あり夏も

冰室なり二ツ岳あり彼の

山の一名なりけるなるべと

木部彈正が室の墓　天神峠の小の麓沼の汀にあり舊き

石を水に沈み後に改め作る臺石に天正十三年十二月廿

七日と、あり木部彈正が妻の沼に入りて死せ

が墓なりといふ此事よつき怪談あり　下卷の伊香保道の記に委し　今は墓を去り

祠を立て祭る木部氏は當國綠野郡木部村より出つ箕輪

軍記に木部宮内少輔實一あり天正中瀧川一益に從へる

士に木部宮内少輔貞朝あり夫婦の族欲又沼の西岸

なる山の傍に吾妻郡原町驛善導寺　浄土宗　二世圓光

上人の母が墓あり明德の年号を記す年こ善導寺供養を行ふ

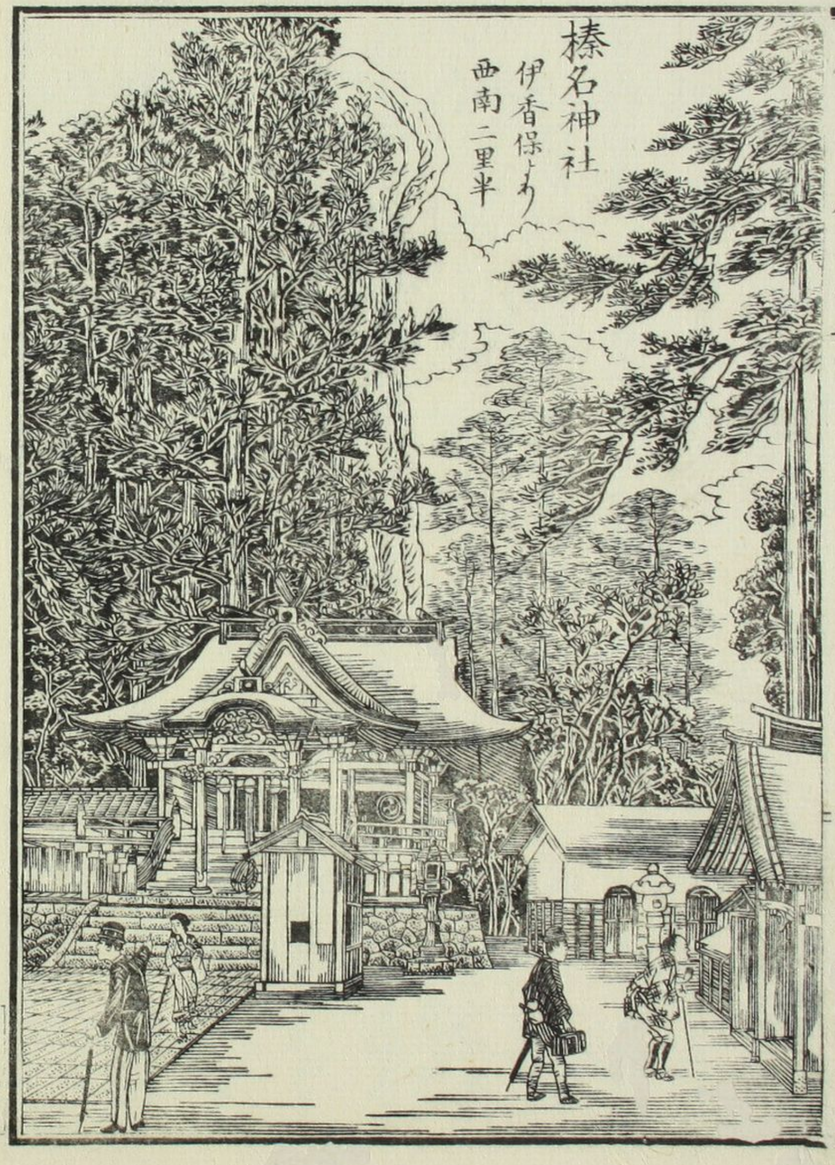
天神峠　沼の西南榛名に超ゆる山の峠なり古の伊香保村榛名村の境

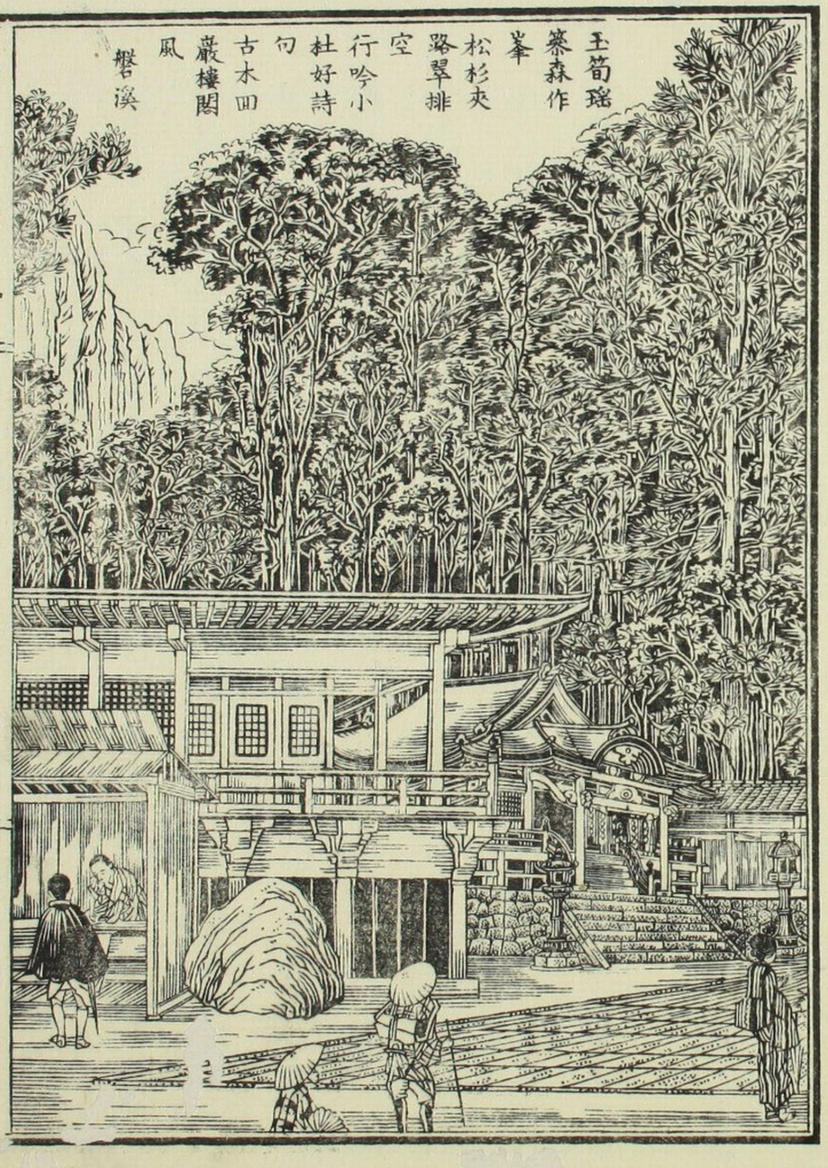
頂に榛名の神の大鳥居ありふの方沼に向ふ兩側に茶屋あり峠

の末の山に天神の石の祠ありこれを名づけ峠よりふの方を

見るかせぎ湖水い沈そを一瑩鏡のめく鬢櫛あぐる山こ影
倒ち水こ映ぎ風光言ちん方をし峠より西南へ嶮しき
坂をひること十八町ばかりを榛名の神社ちるる峠よりいりて沼の西
こ沿ひて行き硯が岳と掃部が岳との間を超えて来ふある吾妻郡
の京町弥ち出づべし又峠より南榛名へ下る路の半より右へ入る
掃部が岳の地蔵峠を超えて
まこと吾妻郡ち出づ
榛名山　當郡の西ある連山の最西ちにめて稍低く西を杏
が岳ち連る此山春名村ち層を萬葉集ち伊加保呂の
榛原ともいふ詠ぞ古此の麓の山ち榛の樹多ク生じ
しを名起るもの狭山ち樹木多く又奇巌怪石を多し
殊ち神社の麓巌石並び立ち突兀をして奇怪々の形を

現ずあるき者を柱の如く聳えて松杉の梢乃上ま出で
横ある者を梁ち似て倒まて谷水の上ち架る葛龍岩
と以へるい葛龍を数積をつげ今や尚きんとする形ちあ
鞍掛岩といふを鞍の前輪を崖ち踞けたる状を為せりあ
外雷電岩大黒岩鎧岩亀岩瓶ち岩獅ち岩のそを岩ぞ
皆ちの形ち依り種この名ちあ数へ盡しがたし渓に
滝々として脚ちち響き松杉を欝こして天日を覆へ
榛名神社　榛名山の南の中腹ち社殿東南ち いふ
近地の郷社なるを古を山ち三千百坊もあめて繁昌ありしと
云後慶長十九年當山法度の御朱印を南光坊東叡山の天海僧正


榛名神社
伊香保より
西南二里半


玉筍瑤
簪森作
峯
松杉夾
路翠排
空
行吟小
杜好詩
句
古木回
巖樓閣
風
磐溪

遣はさる徳川氏の渡を別當金剛院山下里見村光明寺を兼ぬ東叡山子屬し神威水殊子る如きを今を神官の守る所とある本社祭神元湯彦命といふ祭神の事委しく未の三引くん神の辨の条子記す創建年月社傳共子詳ならず社は建久元年十二月榛名寺領云この文書を傳へるのみ九月九日を例祭とす

本社へ登る坂を石段折を曲りて登る中段子雙龍ゞ建つ

龍を彫るの門の上子大巖るく峙つ形ゼいまゝ瓊鉾石を

いふその外社地をもべて巨巖大石突兀として脱て立てるる如く圍えり登るバ本社なり社の後子御姿石と以へる

ものを立てるく空を衝きて聳え立ち中括りて上子頭を

覚しき形ゆり頂る幣立てゝゆり此の巖の下子社を作り

叩けを巖の中に神座をいへつ本社拜殿神楽殿額堂

あゞ皆彫刻美を盡し丹朱金彩きらゞやの目てゆを莊

厳あり鐘子文永五年二月十日大勧進僧栄圓ゆをゆめと

云又額堂の前子鐵燈籠ゆり上野國車馬郡満行權現靈

前元亨三年云ことゆり

石段を下りて子茶屋ゆり右の路を即伊香保路うを

裏門開所の跡ゆり右を總門の方へ到る路の左を今小そ

神橋を渡りて路の左右子岩ゆりて間を僅ゆ二尺許るを

袖摺岩といふ三重の塔ゆり此の室年舊き杉林生ひ立つ

千本杉といふ又橋を渡りて隨身門（田の仁王門）及び紫鉋の鳥居
ありて春名山村ある神人の家左右に並びて師町
といふ（三十六戸今町を抜きて東西に連る村を下きい松杉大に減ず）
路を夾みて高々として雲を衝く降路を西南に三野倉子
至る（二里）本路と又東南を明屋村箕輪に古道に南を室
田村に下る路もあり（共に各三里）

各地高低表

伊香保近傍各地の海面よりの高さを左のごとし明治十二
年夏小林一知君の實測せる所なりと云（晴雨針觀測にして尺は日本曲尺なり）

高崎驛本町	二百六十〇尺	即四十三間二尺
水澤觀音堂上	二千〇三十九尺	即三百三十九間五尺
伊香保（千明三郎屋敷）	二千五百六十三尺	即四百廿七間一尺
同 湯澤谷底	二千四百五十一尺	即四百〇八間三尺
同 向山	二千五百十四尺	即四百十九間〇尺
伊香保神社	二千七百十六尺	即四百五十二間四尺
同 金毘羅山	三千〇四十三尺	即五百〇七間一尺
同 湯元	二千八百三十九尺	即四百七十三間一尺
二ッ岳蒸湯	三千五百廿七尺	即五百八十七間五尺
八ッ塚（榛名路春名村界）	四千〇廿八尺	即六百七十一間二尺
伊香保沼水面	三千六百七十二尺	即六百十二間〇尺

天神峠　三千八百五十五尺　即六百四十二間三尺

榛名神社　三千。七十五尺　即五百十二間三尺

産物

伊香保の産物の第一なる所を即温泉とし一村實ようれ
ヲ依ようて生を営めるを製造の産物を少く湯花染とゝくるを
綿布を湯滓にて染む色赭黄とする腹腰ヲ絡ひて功能ゝ
やゝ久し鏡の拭粉を製る砥の粉と天花粉ゝを製し別ヨ
奉書紙を温泉ヲ浸し乾して揉を去るにて拭ふあり能く鉋
鏡の光を生ぜしむやゝ久しその外ヨ湯晒艾ゝの又近き山の雑材
を用ゐて挽物細工して商ふ店多し山下の畠ヲ植うる大根を

物聞山の時鳥

伊香保町の東南八町ヲ隔ツ谷ヲコヽピラ山と云ふ八景の一とす

夫木集　伊勢

以のかゝる柚寸山の
ほとゝぎす
ほのかに鳴きすぎ
まきのかすゝ船

何來新杜宇啼破嶺頭雲
借問隣樓客一聲聞不聞
磐溪

大あめりかの他小麥豆　移蕎麥こるのみをを冰蕎麦切氷豆腐あぐ製を凡市中日と食用料理の魚鳥穀菜瓜果皆近村より来るその他雑種の食用日用品を皆高嵩より来る夏を是皆の品々の需要莫大なる幸あり

近傍の山より草木禽獸皆の珍奇とをべきもの甚希あり蛇蘇草、草烏頭、耧斗菜、竹をを、萱草の一種花の一重なるものを食べしと云外より伊香保の沼のこのやめ草、ひり岡の如し秋の風雨の後多く生香蓴出づ山林の楢、栗、かしを皆生ずその外近き山より花草多く秋を殊に麗し物聞山の鵑名高し慈悲心鳥を鵑より先だちて啼き後まで止む鶉多くして味美あり

伊香保の沼のこのやめぐを寫生　八景の一と云沼の東の汀より多く生ず古歌多しや巻に狭し田中芳男君云花戸よりカマヤマアヤメといふそのありと岸田吟香君ハ古歌より〻ハナカツミにを深山より多く今のハナミヤウブといふこれを里より移し養ひしにを菖の菖蒲よ似たれば名とせるふくんといふ

拾遺愚草
[illegible]
[illegible]
[illegible]
定家

文人記霊窟勝概
各相誇雲客殊其
賞艶稱杜若花
耕堂榊取縣令

沼の岸今より三十年以前迄は近き山より雉子兎猴猪鹿多
かりしが近年は猟尽せりと云伊香保沼は鯉鮒多く魚類多し
されど多く捕らば夏秋の間東の方三里を隔て利根川の香魚
来らるれば遊浴中の最珍羞とすべし

伊香保、椿名、榛名、三神の辨

延喜神名式に上野國十二社大三座小九座の内群馬郡大一座小二座伊香保神社
名神大椿名神社、甲波宿禰神社と云へり甲波宿祢神社は今群馬郡川島村に在り其の中の
伊香保、椿名の二神と今の榛名の神とは間に昔より論ありて定め
説區まちまちなり或説には式に椿の字を書あるを榛の字の誤りとす
その證を神名帳頭注に群馬郡椿名其所榛名と記し侍るを

式に椿名と云れど實を榛名の書損なりと下心にて思へるを
なほ注しづけるまでに其所榛名とかれしなれば榛名で式
の椿名神社にて箕輪の椿山に在る椿名神社を此社なりとは云へり其の榛
名の里宮なるべしと云又或説に椿名の椿をハルと讀むべきを
ツバキと讀まで誤なりと云説後に出たり榛と文字を書き
かへたるなりと云今按ずるに萬葉集に古く伊加保呂の岨乃榛
原と詠て又延喜主計式の上野貢調の部に榛布三十五端日本紀に葛摺乃
衣と云るもの歟なるべしけりてまべて古く榛に因れば山の名は古くより
榛名にて ハリとハルとは通ずるなるべし椿名ある後に榛名と書きそ
なりとの説に非ずして椿の字をハルと讀むべきを何の故

よく解たべてこれ又榛の書抜あるをいつも當らぬ頭注の
説を都人の遠地の地理を知らぬ推量なるべし椿名の神八今も
箕輪の椿山に座しその地名より由ありて又榛名を榛原に因
られぞそれより各別なるべし又榛名の社を大成経の説より據
まく元湯彦命なり此社の事は論も箕輪の椿名の神八天照大神、
三輪大神、西宮大神はて祭神なと古し又當國甘樂郡一の宮を
群馬郡総社とて古く伝へたるを上野國神名帳を名づくる
もの古めかしき體中群馬郡に正一位伊賀保大明神、従一位椿
名大明神、正一位榛名大明神を分ち載せたり又或説に式の伊
加保の神と今の榛名の神と三代實録に云る若伊賀保の神を

今の伊香保村に座す神なるべしと云る是等の説き妄説なり若
伊賀保を今現に有馬村にあるものなるべし伊加保椿名の二神
そのの名久しく埋もれ榛名のみ世に著きものからこのもいだの
紛こたるぞ今此に余が辨ぜ述ぶ然はどもなれ固より余の推量の
説なれど今を榛名の神人なる官に申して榛名山なる神と式乃
椿名の神の本宮ゆゑ椿山なる社を里宮と定めらるるといへる
然る上を我人なるべきその官の制に従ひてそこにあるべき
榛名の祭神を先代舊事本紀一名大成経に双槻宮上毛國秦名山
峯權現元湯彦命也天照大神五代神に云るに依まて元湯彦命一名彦
由文命又彦湯支と書す文傳巻十八に云

伊加保神社の祭神　今を湯前大明神とゝなへたゝも少毘古那の神あゝとぞ一説に元湯彦友命、又の名彦由支命を申すゝ此社の事記せる物に見えたゝ元湯彦友命、彦由支命といへる神名古書に未見當らぬ事にて少彦名命のまこの名あるべく覚也此社に並びて椿名神社をいる社に今榛名山といふ山にのりて俗に満行宮大權現といふ此神も元湯彦命あゝと社説あり　一説に中に伊弉諾伊弉冊尊左右に國常立尊大已貴命といふをうけごとし或説に式に椿の字を書けるを榛の誤ありといへるを然る説なり　ゝを萬葉集に伊香保呂能蘇比乃波里波良傍の榛原ふる榛名山の云と地名に由りとおぼゆ

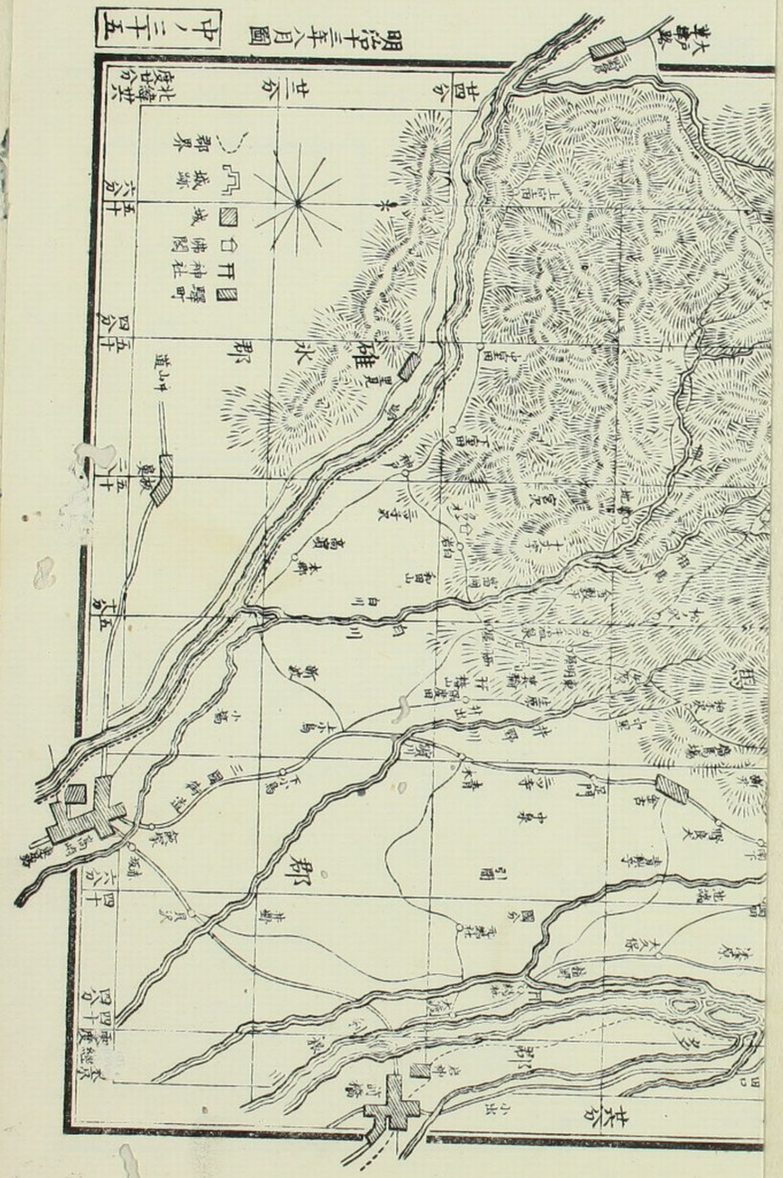
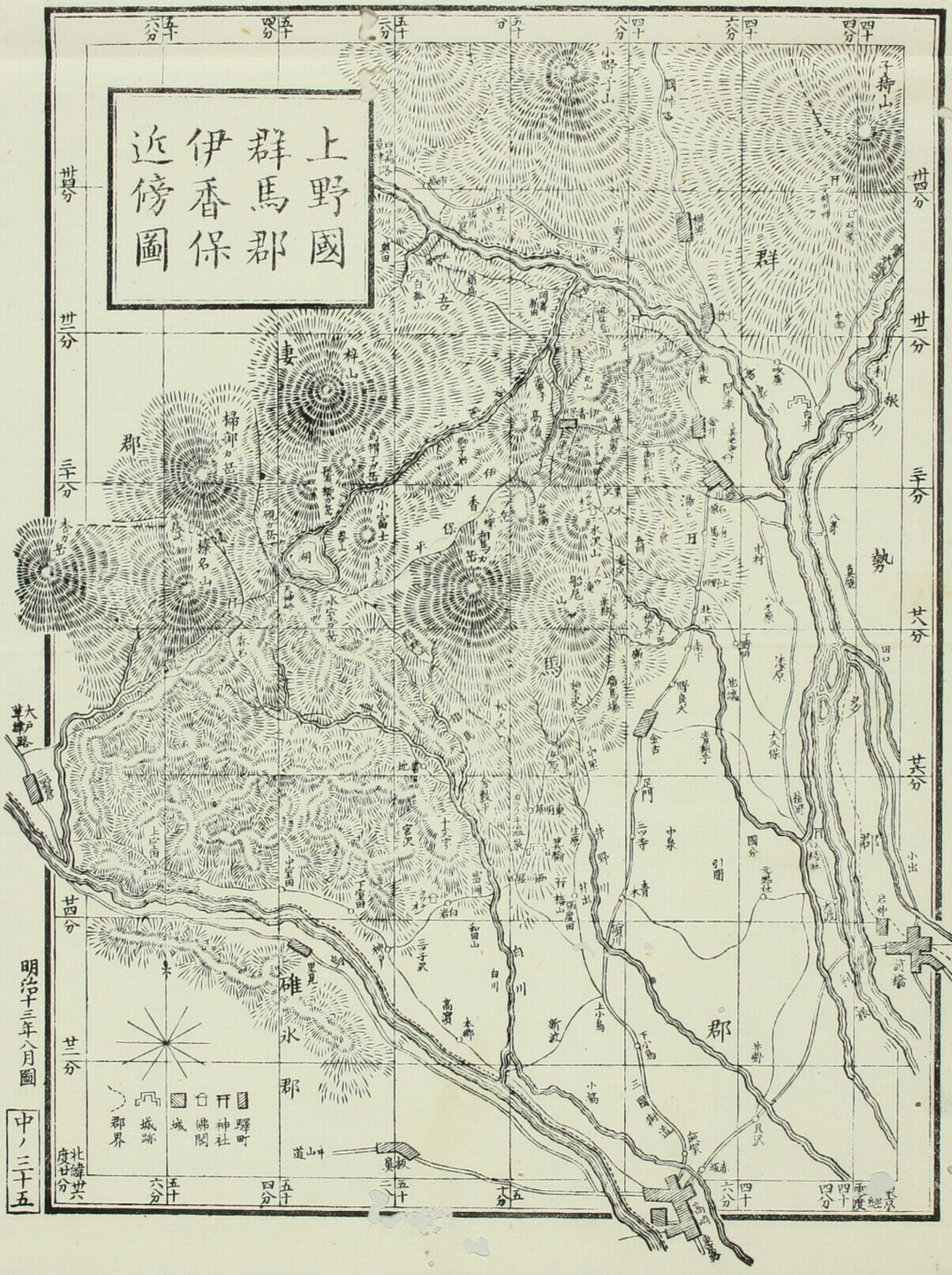
此古史傳の説に伊加保の祭神をも一説を引きて元湯彦友命

ゝせるを何書に據ゝるゝ榛名の社説を混じ誤まるゝるべし又神名を少彦名命の別名なりといへるも大成經の説なる歟知らぬ事なるべし元来大成經も榛名の神を伊加保の神と見たるゝゝ神名に湯の字を用ゐる又僧侶の守る頃を満行宮權現満行將軍或を彦友尊美満持尊埴安大神なゞ稱し或を本地を地藏尊なりとも又満行を佛經の語なるを人名を附會して辛科縁起なゞ書るを上野國西七郡の領主群馬太郎満行を祭るゝ云又榛名由来記をいへるにを南部三郎満行讒せられて榛名に遠流せられ帝を怨を事にて伊香保の江水を依まて其靈を祭るゝなり

その説いとゝ怪しゝ可きも取るに足らざる説どもなり此社を建久年中の文書より既に榛名山寺の稱ありて早くより佛氏の手に入りて創建年月及縁起等も社に更に傳へなしと云

又案ずるに大巳貴命、少彦名命の二神醫藥の事を始め給ひしゝ故に諸國温泉ある地に必ずこの二神を祭る佛氏垂跡の説にて藥師佛とする事何ぞ怪の地も同じ伊香保、道後箱根、伊豆有馬なぞ皆此のめし又神名式に攝津有馬郡に湯泉神社ありて今も有馬に湯山町ありて伊香保まで熱海にも其の神を湯前明神と稱する事湯泉の勢ふるべき歟

伊香保志中巻了



上野國群馬郡伊香保近傍圖